

題目 他者の裏切りを恐れる心：信頼行動の感情基盤の検討

氏名 三浦 亜利紗

指導教官 竹澤正哲

社会の発展にとって信頼は重要であると言われ、多くの分野で注目されてきた。アプローチの一つには、人が人を信頼することがどのように経済活動へ影響するかといった形である。Barber (1983) や Yamagishi & Yamagishi (1994) をはじめ社会学者たちは、人を信頼するとはどのような行為であるかに注目し、相手の能力を信じることと意図を信じることの二つに細分化した。この区別では、カフェでしばし席を立つ際に周囲の人々が荷物を盗まないだろうと信じることや、恋人が他の異性と浮気したりしないだろうと信じるといった、裏切りの誘因が存在する状況、つまり相手の行動に選択肢があり不確実な状況において信頼は可能となるといわれる。また World Values Survey でも「一般的に言って、ほとんどの人は信用されるべきであり、注意深く付き合う必要はないと思いますか？」と尋ねていることからわかるように、社会活動に寄与する信頼は相手が人であることを前提として研究されてきた。しかし一方で、信頼とは人を対象に限るのかという問いに立ち返る人々も現れた。これはつまり、恋人が浮気をしないだろうと信じることは、当たると信じてギャンブルをすることと同じなのかという問いに答える形で、信頼とは何かを明らかにしようとするアプローチである。信頼とギャンブルとは同じであると主張する研究者もいる一方で、近年の実証研究では両者が異なることを示唆する経済学的、脳科学的知見が得られてきた (Houser et al., 2010; Kosfeld et al., 2005)。得られる利得の確率が同じでも、リスク/不確実性が他者の意思決定に依存する社会的な不確実性と自然現象に基づく自然リスクでは、人々がそのリスク/不確実性を冒す意思決定の程度が異なるというのである。Bohnet & Zeckhauser (2004) や Aimone & Houser (2012) は、自分と他者の利得をくじで決める場合よりも、自分と他者の利得について相手に決めてもらう状況において人々がよりリスク回避的になることを示し、人は他者からの裏切りにコストを見積もるのだろうと考え、人に対する信頼とギャンブルとは異なると結論づけた。そしてその裏切りを避けようとする心理傾向と、裏切り回避と名付けた。

このように裏切り回避の存在は示唆されたが、先行研究ではリスク/不確実性状況における意思決定の差を裏切り回避に帰属することに留まっている。つまり、実際に裏切り回避がどのような効果を持つかを示した知見はない。Trivers (1971) は、信頼が長期的な相互協力の達成のために必要であると唱えたが、もしそれが信頼の意義であるならば、信頼は協力に対して説明力を持つ必要がある。そこで研究 1 では、裏切り回避がどのように協力を説明するかを実証的に検討することを目的とし、他者から裏切られることを避けようとする裏切り回避と、ギャンブルではずれることを避ける自然リスク回避とを測定する指標を

作成し、それらがどのように協力を説明するか分析した。協力がどのように生じるかを説明した **Pruitt & Kimmel (1977)** の目標期待理論によれば、相互協力達成への目標と他者の行動に対する期待が協力を説明する要因であり、裏切り回避は予測力を持たないだろうと予想される。そこで、相互協力達成への目標と他者行動への期待に裏切り回避や自然リスク回避を説明変数として加え、囚人のジレンマゲームにおける協力をどのように予測するかの分析を行った。その結果、目標と期待はそれぞれ独立に協力を予測したが、裏切り回避もまたそれらとは独立に協力を強く予測した。また、その説明力はギャンブルを避けようとする自然リスク回避よりも強かった。加えて、探索的に複数の経済ゲームにより測定した向社会的行動を従属変数に同様の重回帰分析を行ったところ、信頼ゲームや分配委任ゲームといった二者間の相互作用ゲームにおいて裏切り回避は説明力を持ち、特に自分の決定を他者に示すことのできない、両者が同時に決定を行う囚人のジレンマゲームにおいて特に裏切り回避の効果が強くなることがわかった。

研究 2 では、裏切り回避とは何かを検討するため、その神経基盤を検討した。**Aimone et al.(2011)** らは、信頼ゲームにおいて信頼を選択する際には、**vmPFC** の賦活とともに扁桃体が抑制されることを示した。**PFC** 系統の活性により扁桃体の働きを抑制するプロセスは、感情調整のプロセスとしても注目されている。感情調整は、自分にとって望ましくない状況を避けたり価値を値踏みしなおしたりすることで興奮を鎮める行為であり、裏切り回避を抑えて信頼することは感情調整の一部であると **Aimone** らは主張した。そこで研究 2 では、感情調整の研究で注目されている事象関連電位の観測を用い、社会不確実状況のプロセスにおいて不安の喚起と抑制が生じるか、またもしそれらが生じたならば、喚起と抑制の程度のいずれかが裏切り回避と関連するかを検討することを目的として実験を行った。結果、社会的な不確実状況に直面した際に不安は喚起されず、信頼した際の結果のフィードバック前にもむしろ裏切り回避の低い人において不安が生じることが明らかになった。

以上の結果から、第一に裏切り回避は協力を強く予測する心理傾向として存在することが明らかになり、社会活動の発展に寄与する要因として裏切り回避は新たに注目されるべき心理傾向であると考えられる。しかし第二に、それは生理的には観察されなかった。これは、裏切り回避は発達の段階で社会的な不確実状況を経験し学習された産物である可能性を示唆する。実際に、学習の過程である部位の脳活動が活性し、学習の終焉と共にその活動が鎮静する例は挙げられている (**King-Casas et al.,2005; Krueger et al., 2007**)。協力を強く影響する裏切り回避が発達の段階で獲得され、個人内で安定して築かれてしまう心理傾向であるならば、それが獲得されることを防ぐ環境や制度設計が求められるだろう。